

20075

冠動脈CTにおけるランジオロール塩酸塩の使用経験

¹鉄芭会 亀田総合病院、²鉄芭会 亀田総合病院

吉田 弘樹¹、加藤 光久¹、小野 雄一朗¹、松村 昭彦²、石川 和弥¹、岩上 亜矢¹、佐藤 和彦¹、渡邊 一博¹、永井 基博¹、有賀 由紀子¹

【背景・目的】近年冠動脈CTは身近な検査となった。冠動脈CTの画質などの向上は撮影時の心拍が重要となる。当院ではβ遮断薬としてメトプロロールを経口投与し目標とする心拍に達するまで時間を要していた。そこで今回2012年1月より短時間作用型のβ1遮断薬（ランジオロール塩酸塩）が導入されたので使用経験について報告する。【方法】冠動脈CTを施行した、メトプロロール経口投与群とランジオロール塩酸塩群に分け検査所用時間、心拍抑制効果等についてそれぞれ評価を行った。尚循環器内科医師指示によりメトプロロールは心拍65以上で経口投与、ランジオロール塩酸塩については心拍65以上で1分かけて体重あたりの投与量を静注し検査を施行した。【結果】ランジオロール塩酸塩群では検査所要時間が有意に短くなった。また心拍の低下を認め、また副作用等の報告はなかった。しかし、高心拍症例においては目標とする心拍への到達率がランジオロール塩酸塩群では減少した。【考察】ランジオロール塩酸塩は有意に検査所用時間を短縮でき、スループットの向上に繋がったと思われる。しかし高心拍症例など目標とする心拍へ到達や、撮影方法などを考えると、心拍数に合わせたβ遮断薬の使い分けが必要と考えられる。